# スポーツ集団の凝集性と運動継続の関係

学校教育教員養成課程　教科教育コース　保健体育専修　07PB616　角田　早織

## Ⅰ．研究の目的

現在、生涯スポーツの重要性は多くの人が認めるところである。自主的なスポーツ継続の意志を持つためには、現在のスポーツ活動の充実や満足感が必要であることは金崎(1989)や山本ほか(1992)の研究で明らかになっている。そこで、成員が集団に感じる魅力である集団凝集性に着目し、集団凝集性を高めることにより、スポーツを継続する意志を持てるのではないかと考え、この研究を進めることにした。集団凝集性とは、一般に団結、一体性、集団の雰囲気、集団のまとまりといった言葉で表現されるものである。

本研究は部員の競技年数や試合への出場状況などを分類することで、凝集性を高める要因、凝集性に影響を与える変数について検討することを第一の目的とした。そして現在の部活動における凝集性の違いが、今後のスポーツ活動継続意志にどのように関わるかについて考察することを第二の目的とした。

## Ⅱ．研究の方法

体育会運動部に所属する大学生 200 人(男子 153 人、女子 47 人)を調査対象者とし、性別、年齢、競技年数、最高競技成績、試合への出場状況、部内の役職、指導者の有無、卒業までの部活動継続意志、卒業後のスポーツ継続意志について記入する項目と、阿江(1986)が開発したスポーツ集団凝集性質問紙、山本(1990)が開発した大学運動部への参加動機調査票からなる質問紙を配布した。その後集団凝集性の得点において競技年数や試合への出場状況などの分類ごとに差がみられるのか分析した。

## Ⅲ．結果と考察

1．性別における比較

総合得点、とくに対人魅力凝集で女子の方が有意に高い得点を示した。男子は課題凝集が高い傾向を示し、これらの違いは男女の運動部への参加動機の違いによるものだと考えられる。

2．競技年数における比較

総合得点、チームワーク、価値の認められた役割で長期が有意に高い得点を示した。競技を長く続けることによる、部への帰属意識や責任感が凝集性の高まりに影響を与えたと思われる。

3．試合への出場状況における比較

総合得点、チームワーク、価値の認められた役割で試合に出場する部員の方が有意に高い得点を示し、先行研究の結果を支持するものとなった。

4．指導者の有無における比較

総合得点、価値の認められた役割、目標への準備で指導者ありの方が有意に高い得点を示し、大学部活動においても指導者の重要性がうかがえる。

その他に競技種目、最高競技成績、役職についても検討したが有意な差はみられなかった。

5．卒業までの部活動継続意志における比較

総合得点、メンバーの親密さ、チームワーク、魅力で「続けたい」の方が「続けたくない」より有意に高い得点を示し(図 1)、部活動に積極的な継続意志を持っている者は、特に対人魅力が高いことが明らかになった。部内の人間関係に魅力を感じ、満足していることが部活動継続を促進させるといえる。

6．卒業後のスポーツ継続意志における比較

有意な得点差は見られなかったが、「現在と同様の頻度で続けたい」がすべてにおいて得点の高い傾向を示した。現在の部活動において対人魅力、所属・課題凝集ともに高い者が、今後のスポーツ活動に積極的な継続意志を持っているという可能性が示唆できる。

## Ⅳ．まとめ

本研究では集団凝集性は女子の方が高く、競技年数が長いこと、試合に出場すること、指導者がいることが凝集性を高める要因であるという結果を得た。また、凝集性の高い者の方が卒業までの部活動において積極的な継続意志をもっていることが明らかになったが、卒業後のスポーツ継続意志に関しては、凝集性の高い者の方が積極的な継続意志を持っている傾向を示すに留まった。本研究の結果から、集団凝集性を高めることにより、スポーツを継続する意志を持てるということを断定することはできないが、その可能性は十分にあり得ることであると考える。

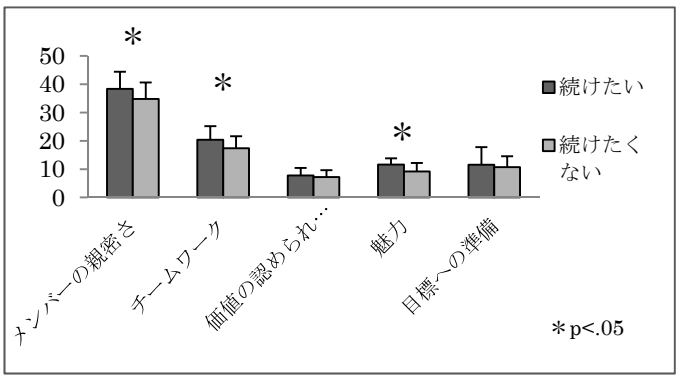


図１　卒業までの継続意志別における下位尺度の比較